

# 平成25年度教師海外研修（ラオス）研修報告書

## 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

※各訪問先について受講者 2 名ずつが担当して記載(文末( )内は記載者氏名)

### ① JICA ラオス事務所オリエンテーション

「国際協力でも大切なことは、途上国・先進国双方がどうやって波長を合わせるかということ。語学よりも適応が求められる。」JICA ラオス事務所の瀧澤次長さんのこの言葉は大変印象深かった。これまで国際協力というと、先進国が技術や物資を途上国側へ伝え、贈るといったいかにも一方的な考えを持っていたが、途上国のやり方や考え方、地元の方を理解するところから始まり、地道な話し合いの元で活動が成り立っていることを新たに学んだ。語学は便利な意思伝達のツールだが、現地に適応できなくては語学も意味をもたなくなってくるということか。英語教諭として、新しい視点と今後の課題を得ることができた。また日本でできる国際協力として、現地でどんなニーズ・シーズがあるか、成功モデルの近くで支援を試みる（JICA センター等）といった具体的方法を教えていただいたことも貴重だった。（和田さとみ）

ラオスの事務所ではラオスの現状と JICA の取り組みについて教えていただきました。一番印象に残っていることは、ラオス人と日本人のやりたいことが違うのでどう歩み寄っていくかが大切だということでした。ラオス人は橋を作ったりバスを購入したりと、目に見える成果を出してほしいと考えます。しかし、日本人はそれを管理する人材も育てていかなければ考えます。そのためにお互いがしっかり話し合いを進め、住民参加型で活動を進めていると教えていただきました。最近ラオスに進出を進めている他の東アジアの国々は、ラオスの国のことを考えているよりも自国の利益を考えていることもあり、JICA の活動の重要性を知ることができました。

現地のやり方を理解しながら、新しいことを伝えていくのが JICA の活動であり、日本の小中学生でもスライプを用いて授業実践をしたり、シューズをラオスに送ったりと、身近なところからやれることはたくさんあることが分かりました。（杉村定則）

### ② アジアの障害者活動を支援する会活動

ここでは現地の障害者に対して自立と社会参加を促進するために様々な活動がされていました。一つ目に訪ねたのが車椅子バスケット。ここで指導をされている前島さんは、家にこもっていい人たちがスポーツを通して元気になっていく姿にやりがいを感じると話していました。実際、バスケットをしている人たちはとても笑顔にあふれていました。私たちも一緒に車椅子バスケットを体験したのですが、なかなか思うように動けません。そんな私たちにも丁寧に車椅子の操作を教えてくださいました。

次に訪ねたクッキー製作を行っている作業所では 27～43 歳の女性が働いていました。彼女たちもここで働くまでは外の世界との関わりがほとんどない状態であったそうです。それがクッキー製作を通して仲間ができ、社会と繋がり、将来は独立したいという目標をもつようになったそうです。

どちらの訪問地でも感じたことは「仲間がいること、社会とつながることの喜び」でした。障害の有無にかかわらず、一人一人が力を発揮できる社会にしていくことが、日本もラオスも共通する課題だと感じ

ました。(籠谷美紀)

ラオスで脚に障害を負う主な原因はポリオ、交通事故、そして未だラオス南部に存在する地雷による被害。どれも途上国の現状を物語っているかのようで心が傷みます。そんな中、車椅子を自分たちでデザイン・製造し、仕事の合間にバスケットを行う方たちに会いました。我々も車椅子に乗り、一緒にゲームを試してみましたが、まるで歯が立ちません。彼らは非常に生き生きとし、夢をもち、輝いた顔でバスケットをしていました。また、聴覚障害や脚に障害をもった女の子たちが作るクッキー製作を見学しました。タイなどの事業成功例を参考に、ラオスに進出する日本企業に提供・販売しているということです。さらに美容院でも聴覚障害をもった方がネイルアートやシャンプーを行っていました。彼女たちは自分の仕事に誇りを持ち、社会に出ることの喜びを語ってくれました。障害者支援というものは、いつも最後に回されるのが現状です。日本においてもバリアフリーやユニバーサルデザインが一般的に見られるようになったのは最近のことです。ましてや途上国の状況では、障害者を支援するという概念があるのかもわかりません。そんな中で、障害者の方が独立し、社会の中で生きていけるように支援を続ける2名の日本人。社会的弱者に目を向けることも、ラオスの今後の課題であると感じました。(服部 咲)

### ③ ラオスパイロットプログラム環境コンポーネント (LPPE)

ラオス環境省にて志村専門家からラオスパイロットプログラムに関する最初のブリーフィングを受けた。東南アジア諸国連合 (ASEAN)、ラオス政府、JICA の共同事業と聞き、非常にスケールの大きなプロジェクトだと感じた。そのなかで LPPE は環境に焦点を当てた取り組みだった。志村専門家の説明は限られた時間の中でとても分かりやすく説明して頂き、我々でも LPPE の概要をつかむことができた。

その後、ルアンプラバンにてエコバスケットの配布活動を視察した。JICA 専門家の稲森さんは、集会所に集まった地域の人々へ時に冗談を入れながら上手に説明していた。マーケット（市場）では商品を必ずビニール袋に入れる。結局それが自然に帰ることなくその辺に捨てられてしまっている。そんな現状を改善しようと始まったエコバスケット配布活動は色もデザインも素敵で自分としては思わず使いたくなるようなものだった。早速マーケットで使っているおばちゃんやおじちゃんに出会ったとき、自分たちが「エコバスケット！」と言いながら声を掛けると、彼らはちょっと照れくさそうにしながら、もらったばかりのバスケットを掲げてくれた。今後は旅行者にエコバッグも配布する予定だそうで、古都ルアンプラバンが世界遺産にふさわしい、素晴らしい街になることを願っている。また、LPPE のような壮大な取り組みも、エコバスケットのような小さくて地道な取り組みを端緒として実績を積むことで徐々に変革を促していくことなのだと感じた。(加藤 篤)

LPPE では、ラオスにおいて「環境的に持続可能な都市」づくりを促進するための事業を実施することを目的に、エコステイプロジェクトやエコバスケットの配布、有機ゴミコンポストの配置などの活動を行っている。今回の事業を見て「感じたこと」は、前にも書いたが、現地の生活にあった形で事業に取り組んでいることである。「環境と成長の両立」を掲げ、ラオスらしさを失わないような支援や開発を行い、廃棄物管理能力の強化を図っている。有機ゴミコンポストの活動では各家庭にミミズを使って有機ゴミからミミズの体重の約3倍の肥料を得られるコンポストの配置を行っていた。このミミズのコンポストはおそ

らく日本では普及していかないであろう。日本の生活スタイルには根付いていかず、ラオスであるからこそできるものだと感じた。このように、日本でやり方が最善と考えるのではなく、ラオスの人たちが扱いやすいように、プロジェクト終了後もラオスの人々だけで継続していけるように配慮されたものだと感じることができた。(早川修平)

#### ④ ルアンプラバン市内歴史施設・景勝地

「なかなかキツイ…」と運動不足を感じさせられる 328 段の階段を上った先には、とても美しい光景が広がっていました。ルアンプラバン市内を 360 度一望でき、ある場所ではメコン川のゆったりとした流れ、ある場所では豊かな自然の緑と家の赤い屋根と白い壁のコントラストを眺めることができました。暑さも忘れ、疲れも吹き飛ばすような光景にしばらく見入ってしまいました。そんな景色を眺めながら、世界遺産に登録されたこの都市はこれからどのように変化していくのだろうかということを考えていました。過去にフランス領という歴史を持つ国、国内でも幾度かの紛争を経ている土地、そして現在政治的に社会主義体制をとっているものの（社会主義が悪いというわけではありませんが）、街全体にゆったりとした優しい雰囲気があるのはなぜだろうという漠然とした疑問も感じていました。世界遺産都市としてこれから観光客が増えていくと思いますが、このゆったりとしたところはラオスのとてもいい面であり、ぜひ変わらないでこれからも残ってほしいと思いながら、美しい街の景色を眺めていました。(山田浩子)

王宮博物館は元の王宮が、博物館として開放されている。どの部屋もとても広く、実際に使用していた当時の調度品や、各国からの贈答品が飾られていた。私が驚いたのは、1 枚の大きな絵だ。そこには、王様が描かれていて、どの方向から見てもその絵の王様と目が合う。どこからでもあなたのことを見ているよ…という意味が込められているようだ。

長い長い階段 328 段をのぼると、プーシーの丘にたどりつく。頂上からは、町全体が見渡せ、とても優雅な気持ちになった。タート・チョムシーという金色の仏塔の横の小さな売店で、不思議なものを見つけた。それは、小さな籠に入った鳥。籠から鳥を出した時に、上に飛んでいけば願いが叶うと言われているようだ。これは、タイから伝わってきた迷信らしい。(浜島直美)

#### ⑤ 托鉢現場

ラオスには仏教を中心とした素晴らしい文化がたくさんあった。その 1 つに托鉢があげられる。朝早くからお寺の鐘を鳴らし、町の人々へ合図を送る。そのあと、オレンジ色の服を着た小さな坊主の男子たちが両手で金属の器を持ち、お米などの食料を器の中に入れてもらいながら町の中を歩いていく。器の中に入れるものは何でもよく、お坊さんたちが勉強をするために鉛筆やボールペンなどを入れても良いらしい。器にもものを入れる際にはルールがあり、必ず座ってお坊さんよりも低い位置で渡さなければならない。また、女性はお坊さんに触れてはならず、供物は直接手で渡してはいけないなどというルールもある。日本の托鉢の様子とは異なった点がたくさんあり、その中でも托鉢をしている年齢には驚いた。日本で托鉢をしている人たちは、大人の方が多いと思うが、ラオスでは 5 歳の子どものも托鉢をするそうだ。本当に貴重で、日本では体験することのできないことをすることができた。(早川修平)

早朝 5 時 30 分、うっすらと朝靄がのこるルアンプラバンの朝。夜はナイトマーケットで賑わしさを見せたホテル前的大通りは、しんと静まりかえり、托鉢の様子を一目見ようと集まる観光客やいつもの日課で集まってきた地元住民が厳粛なムードの中、橙色の一团を静かに待った。しばらくすると朝靄の向こうから鮮やかなオレンジ色の袈裟を着たお坊さんが一列になって現れた。年長の者から列をなし、ゆっくりゆっくり私たち一行に近づいてきた。それは厳かなムードだった。お坊さんの中には若干 5 歳ほどの小坊さんもあり、先輩の後を追ひ、大地を懸命に踏みしめ颯爽と歩いていた。小さいながらも威厳があり、とても大きくみえた。私たち一行を含める道行く人々から静かに品物を受け取り、何事もなかったかのように、そして風のように去っていった。仏が生きているなら、きっとこんな姿だったにちがいない。(和田さとみ)

## ⑥ ルアンプラバン市内市場

ルアンプラバンの朝市には、どこか日本の朝市と似ているような部分があるように感じられたが、見学に行ったときの驚きはとても大きかった。大小様々なトウガラシや野菜、メコン川で獲れた大きなナマズや魚、丸々 1 羽の鳥や大きな豚肉のブロック、東南アジア特有の変わったフルーツなど、日本とどこか似ている部分があると言いながら、並んでいる食材はやはり日本にはないラオス独特のものであった。そして、虫が寄ってこないようにと、棒の先端にビニール袋を付けた道具をずっと振っているお店の方からも日本との違いを感じた。

夕方近くなると、今まで車で通ることのできていた道に、赤や青色のテントがたくさん張られ通行することができなくなる。そして、そこでは色鮮やかな綿や絹などの製品やシンベルトなどの金属装飾品、絵や竹でできた入れ物など朝市とは異なる商品がたくさん並んだナイトマーケットが始まる。あたりは真っ暗の中、ナイトマーケットが行われている場所だけはとても明るく光っている。とても不思議な雰囲気でした。(早川修平)

朝市。ここにはラオスの食材がずらりと並んでいました。ビーチパラソルのような傘を差し、その下に所せましと並べられた商品。日本でも見慣れた野菜から、大量のスパイス、ナマズのような魚、ピンク色に染められた卵など、異文化の宝庫でした。店番をしながら魚をさばいたり、ご飯を食べていたりすることも多く、また子どもが店番をしている姿もよくみかけました。ここの市場には周辺の街からも多くの人を訪れるそうで、活気がありました。

ナイトマーケットでは、売られている商品が朝市とは違い、工芸品が多くみられました。中でも細かな刺繍が施されたポーチは色も鮮やかで目を引きました。この刺繍は各家庭で内職しているもので、民族によって模様も違います。他にもシンの生地やストールなどの織物が多く売られていました。これら売って貴重な現金収入を得ているそうです。毎日ナイトマーケットの時間に商品を並べ、また持ち帰ることを繰り返しているのに、いつも几帳面に商品が並べられていることも印象的でした。(籠谷美紀)

## ⑦ ラオス森林減少抑制のための参加型土地・森林管理プロジェクト (PAREDD) [ホアイコット村]

森林減少抑制に関わるプロジェクトで、地域の人に理解してもらい、地域の人とどうやって一緒に活動していくかという、地域との関わり方について見させていただきました。地域で昔から行われている焼畑農業を止めさせるのではなく、このまま続けて行くとどんな問題が起き、どんなことを進めていくとよいのかを一緒になって考えていくやり方はすばらしいと感じました。

私たちがその活動を見させていただいたとき、中心になって活動に関わっている西本さんは説明に加わらず、村長さんやプロジェクトの現地職員が一生懸命説明している様子を少し離れて見ていました。何十年もこの活動に関わっていく現地の方が説明することによって、自分たちの活動であるという自覚をもってもらうためにそうしているそうです。短い任期の中で、自分が帰国してからのことを考えていうことが分かりました。(杉村定則)

ラオスの森林は近年でかなり減少をしているとのことでしたが、プロジェクトが行われているホワイコット村では、現地の委員会メンバーから詳しい説明をいただくことができ、村民の環境への意識の高さを感じました。しかし JICA 専門家の西本さんの「村の人たちは、感覚的には環境の変化には気付いているが、気候変動や二酸化炭素など難しい話はわからない。ここをどうつなげていくかが重要。」という言葉にとっても重みを感じました。また同時に、プロジェクトに関わっている同じラオスの中でも村ごとで意識が違うことがわかりました。西本さんが私たちに日本語で「彼は村の中でも保守的で、隣の村のことを(全然ちゃんとやってくれないなどと)責める。」と紹介した委員会のメンバーがいたのですが、きっと他にもそのような意見の相違や衝突はあるのだと思います。ラオスの未来のため、プロジェクトが終わってもラオスの人々が継続して環境を守っていけるようにするために、時間がかかったとしてもそのバランスを取ることが重要なのだと感じました。(山田浩子)

#### ⑧ 青年海外協力隊(看護師)活動 [サヤブリー県病院]

サヤブリーで出会った青年海外協力隊の田代さんの活動は主に院内の各科を回り、課題を探したり看護の質を上げたりすること、また、院内の環境を整えることでした。私たちが訪ねた時はゴミがほとんど落ちておらず清潔感のある病院でしたが、田代さんが赴任した当時はゴミだらけだったと聞きました。まずはゴミを捨てる、掃除をする習慣をつけること。ラオスの人に衛生管理の大切さを意識化、日常化すること。2年間の活動でようやく習慣化してきたと、田代さんは笑顔で話してくれました。今後、整備すべきところは多くあります。サヤブリー県だけではありません。それを考えると、「いったいあと何年かかるんだろう・・・」と思わざるを得ません。しかし、まもなく任期が終わる田代さんは「小さなことでも何か影響があればいい」と笑っていました。結局、私たち一人ができることはほんの小さなことです。それでも「何かできれば」と小さな希望、小さな期待を持ち続けて活動することの大切さを感じました。(服部 咲)

サヤブリーの病院は大変整っており、施設もきれいでスタッフも充実していた。青年海外協力隊の田代さんからは、最近医療ゴミの回収が始まった関係で、衛生面も徐々に改善をされていると伺ったが、毎日田代さんが習慣として実施されている朝の掃除に始まり、ゴミの分別を行うなど、決して口で指示することなく自らの姿でもって啓発を試みられる田代さんの姿には心を打たれた。衛生管理が整っているのは、

田代さんの日頃からのたゆまぬ努力の元にあるのだと感じた。私の中では病院の巡回訪問の最後で伺った話が最も心に残っている。それはラオス人の「死の迎え方」だった。入院患者に死が近づくのが分かると、どの家族も急いで患者を家に連れて帰るそうだ。たとえ病院で死を迎えた患者であっても故人が生きることにして酸素マスクをつけ、自宅に帰る。ラオスの家族の繋がりの深さを物語っていると思った。(和田さとみ)

### ⑨ 青年海外協力隊（青少年活動）活動 [子ども文化センター]

たくさん子どもたちが、笑顔で迎えてくれた。どんな人がくるのだろう、何を教えてくれるんだろう…という表情で私たちをみている。自己紹介をすると、私たちメンバーの名前を日本語で復唱してくれたので、緊張がかなり和らいた。私のグループは、端午の節句の話をした後、新聞紙で兜を作った。日本語がたくさん書かれている新聞をととても興味深く見ながら兜を折っていた。「サムライ」という言葉を覚え、兜をかぶり、「サムライ、サムライ」と言いながら最高の笑顔でお礼を言ってくれた。子どもたちへのインタビューで「大切なものは両親、欲しいものは知識」と答える姿を見て、ラオスの明るい未来を感じた。「第二の母であり、友達であり、知識を教えるのが先生である。子どもたちの未来が明るいように」というケイソーン先生の言葉が忘れられない。(浜島直美)

子ども文化センターにいた子どもたちの目はきらきら輝いていた。日本から先生がやってくる。自分たちに知らないことを教えてくれる。子ども文化センターは、訪問したわたしたちにとっても最も楽しみにしていた場所だった。わたしたちが教材作りのためにインタビューをして聞きたいことを聞いたり日本の文化や遊びを紹介したりする場面もあり、教室には子どもたちの歓声が響き渡った。子どもたちから、ラオスの民族舞踊や青年海外協力隊の神田さんに教えてもらったダンスの披露があった。子どもの中に、一人ダンスがとても上手な男の子がいた。実はその子はゲイだった。とても人なつっこい子でこの施設の人気者になっていた。この子の周りにいつも人が集まるそうだ。周りの友達もこの子の個性を認め、受け入れている。違いを自然に受け入れる文化がある国だと感じた。最後に子どもたちと一緒に民族舞踊やダンスを踊った。生き生きとした子どもたちに癒される時間となった。ここでの体験を日本の子どもたちに早く伝えたいと思う。(櫻井利幸)

### ⑩ 青年海外協力隊との懇談会

あふれんばかりのパワー！！とまらない話！！サヤブリーで活動している3人の青年海外協力隊（田代さん、神田さん、本間さん）はこれらの言葉でも表現できないくらい元気いっぱいでした。昼間に活動の様子を見せていただいたときもキラキラとした表情が印象的だったのですが、夕食を食べながらいろいろな話を聞く中で、一人の女性／男性としても魅力的な人たちだなと感じました。

私は神田さんと話す機会が多くあったのですが、彼はもともと沖縄で演劇を専攻しており、青年海外協力隊としての任務が終わった後も、海外で演劇の勉強をしたいとのことでした。具体的には即興劇に関心があるということで、どんなのかと聞いたところ、突然にも関わらず我がラオスチームのお笑い担当のゴリちゃんとコラボで即興劇を披露してくれました！休み時間や休日に子どもたちが家に押しかけてき

て遊んだり、山に登ったり（軽いハイキングだと思ったら危うく遭難）するそうですが、その話からもすっかり現地の生活に溶け込んでいる、その心のおおらかさを垣間見ることができました。（山田浩子）

サヤブリーで活躍する青年海外協力隊の3人はそれぞれ個性が際立っていて、食事会中、笑いが絶えなかった。子ども文化センターの神田さんから、正しいカオ・ニャオの食べ方を教えてもらった。我々はこれまでずっとカオ・ニャオを食べずに旅をしてきたので、彼にみんなの視線が一斉に集まると、彼は緊張しながらも一生懸命説明してくれた。まず、ご飯（もち米）を一握りし、練ってから左手に移す。次に左手のご飯を一口大に千切り、中央部を少し凹ましてスプーン状にし、おかずをご飯にすくいながら食べるということだった。また、神田さんからは子ども文化センターで我々が披露した出し物についても聞いてみた。子どもたちが静かにしているから、自分たちはてっきり受けが良くないんだとしょげていたが、神田さんからは、ラオスの子どもたちは人の発表中に騒ぐのは行儀が悪いからじっとしてただけで、内心ノリノリだったことを知らされた。子どもたちに「一緒に歌って」と一声かければ歌い出したと聞いてますます残念な思いをした。3人からは、青年海外協力隊の活動での困難や苦労を跳ね返していくパワーと前向きな姿勢が見られた。苦難を乗り越えられたのはきっと彼らの真っ直ぐな気持ちが現地の人たちに受け入れられたからだと思った。田代さんはもう間もなく任期が終わってしまうが、残りの時間を楽しく過ごしてほしい。あとの2人は、任期が終わるまで全力投球してほしい。（加藤 篤）

#### ⑪ 青年海外協力隊（バレーボール）活動 【サヤブリー県スポーツ局】

「日本はチャンスや幸せに溢れている国である。」「幸運に恵まれているからこそやりたいことができる。」そのような言葉を青年海外協力隊の本間唯子さんから日本の子どもたちへのメッセージとしていただいたとき、本当にその通りであると感じた。日本には高機能・高性能で非常に便利なものがたくさん溢れ、それらがあることに当たり前と感じている。しかし世界を見ると、それは当たり前ではなく、とても恵まれた環境であり、物以外にも、勉強ができる、好きな仕事に就ける、自分のやりたいことができるなどとても多くのチャンスにも溢れている環境であると私自身改めて考えることができた。

また今回はラオスの子どもたちと一緒にバレーボールをする機会があった。一緒にプレーをしていると、会ったばかりの日本人とラオス人なのにないつの間にかコミュニケーションが取れていた。言葉はお互いわからないが、スポーツを一緒に楽しむことによって言葉の壁すら簡単に越えることができた。（早川修平）

バレーボールの指導がなぜ国際支援なのか、実際の活動を知らない人たちからはそう問われることもあると聞きました。しかし、実際に活動を見せていただき、この活動にはバレーボールそのものを教える意味と、責任感や協力し合うことなどバレーボールを通して教えているものがあることがわかりました。

青年海外協力隊の本間さんのお話では、活動を始めた時には体育館はゴミだらけで、毎日掃除をすることから始めたということでした。その掃除も初めはなかなか定着せず、子どもたちはやりたいことをやって指示も通らない状態だったそうです。それが私たちが訪問させていただいた時には、体育館内にはゴミ一つなく、子どもたちはてきぱきと行動し、私たちの手を取って教えてくれるほどでした。子どもたちに本間さんの印象を聞くと「自分たちのことをよく考えてくれる。悪いことをしたらきちんと叱ってくれる。」と話していました。日本とかラオスとか関係なく、一教師として本間さんが子どもと向き合う姿が

まぶしく見えました。(籠谷美紀)

## ⑫ モン族の村 (道中の少数民族の村)

少数民族であるモン族の村に立ち寄ったところ、ちょうど法事が行われているところでした。そんな大事な儀式であるにもかかわらず、快く受け入れていただきました。法事といっても日本でよく目にする法事とは作法も雰囲気も異なっていました。私たちが見たときにはちょうど子どもたちだけが集まって儀礼を受けていたのですが、これには亡くなった方の子孫を集める、という意味があるそうです。他の違いで一番驚いたのは、扉の前に生け贄としての子犬の頭が捧げられていたことです。子犬の頭を捧げることで、家にやってくる悪いものをかんでもらう、ということだそうです。説明を聞くと納得する部分もあるのですが、犬を食べる習慣のない私たちにはとてもショックな場面でした(法事が行われている場所の隣では、犬だろうと思われる肉が鍋で調理されていました。)

また生活している家の中も見せていただきました。家には、昔高地にすんでいたころの名残で窓がありませんでした。また、壁に貼ってある紙や家の中心の柱を神として信仰していて触れてはいけない、と説明を受けて初めて知ることでした。貴重な経験ができたことに感謝すると同時に、今後これらの少数民族の暮らしがどのように変化し伝統的な部分がどう伝わっていくのか気になりました。(山田浩子)

少数民族、モン族の村を見学した。たまたま法事をしていてお兄さんの霊を呼んでお祈りをしている場面だった。親族が集まり、一日かけて行う大事な行事だと聞いた。入り口の一つに子犬の首が供えてあった。これは、神に捧げて、悪い霊が家の中に入ってこない呪いの儀式だそうだ。このような風習は 49 ある少数民族それぞれに形を変えて存在するとのこと。訪問したお宅では、竈の周りに折り紙で作った神様がおり、この地域では火は神聖なものとして大切に扱われ、家の真ん中に神様がおりと信じられているそうだ。お供え物の犬は煮て食べる。犬を食べる習慣はベトナムの影響があるそうで、私たちにも犬の料理を準備してくれていた。時間が無くなり料理を戴くことはできなかったが貴重な体験だった。ラオスでも首都を中心に車が走り、文化的な暮らしに変わってきている。伝統的な風習は少しずつ無くなっていくかもしれないが、文化を守っていくことは大切なことだと思う。少数民族の生き方を認め、守っていくのもラオスの課題の一つだ。(櫻井利幸)

## ⑬ メコン川クルーズ及びパクウー洞窟

パクウー洞窟は、メコン川の上流にある洞窟。住民らが運び込んだ大小様々な仏像が所狭しと置かれていた。仏像の顔の表情や手の動きはどれも違い、それぞれ意味があるようだ。観光客が多く、にぎやかなのだが、そんな中にも神聖さがあり、手を合わせて祈る人々の姿が印象的だった。仏教を大切にするラオス人だからこそ思い付いた観光地なのかもしれない。その国にはその国が誇る文化があるが、幸せを祈る気持ちは万国共通のようだ。メコン川クルーズでは、スコールによる嵐を体験した。急に降ってきた大雨に、私たちは大あわて。力をあわせてビニールで窓をおおった。慌てているわたしたちの姿を見て、「こんなことよくあることだよ。」と言いながらラオス人の船頭は笑って見ていた。日本での‘あたりまえ’とラオスでの‘あたりまえ’の違いを実感した瞬間だった。(浜島直美)

メコン川は赤かった。川沿いに多くの村があって、川岸で魚釣りの手伝いをする子どもたちに手を振り、あいさつを何度か交わした。竹林や壮大な岸壁を見ていたら、途中どうしてもトイレに駆け込みたくなり、船に設置されているトイレに入った。そこに驚きの事実があった。トイレの水は赤かった。なんとメコン川だった！…あとは想像通りである。そこで魚釣りをしていた子どもたちを考えると何とも申し訳ない気持ちになってしまった。しかしこれがラオスの事実だ。自分たちが当たり前と思っている「川」の概念は日本固有のものであり、国を跨いで流れる川はきっとこれが当たり前なのかもしれない。クルーズのトイレは私に新しい視点を与えてくれた。目的地のパクウー洞窟では、ありとあらゆる仏像が奉納されていた。日本の大黒様も奉納されていて心が和んだ。仏像はしばらくしたら持って帰るのだそうだ。(和田さとみ)

#### ⑭ サンハイ村（地酒造りの村）

昔ながらの地酒造りが今も残るサンハイ村。今は徐々に観光地化されていて、欧米からの観光客の姿が目につきました。現地の人も観光客向けに商品を並べ、その収入が彼らの大切な資金となります。日本では工場で機械を使って行う酒造りの行程も、古くからある道具を使いすべて手作業で行っています。今後発展が進むと、酒造工場ができたり大量生産のために機械を導入したりするかもしれません。そしてそれらの運営を誰かが担っていくこととなります。近い未来、必ずそういった変化がラオス全体で起こってくると思います。周辺国がどんどん参入している現在のラオス。ラオスの人がみずからの手で運営を行い、きちんと彼らに利益が下りてくるような仕組みができるといいと感じました。また、何十年後、再びラオスを訪ねた時に、古くからの方法と新しい方法とが上手に織り交ざっているような、そんな国になっているといいと思いました。(服部 咲)

地酒造りの村は、ラオスメンバーが訪問を楽しみにしていた場所の1つでした。村というので、工場がたくさんある景色を想像していましたが、そこはラオスの小さな村。ドラム缶が2本置いてあり、夫婦で酒造りをしていました。酒造りの村では、ラオラーオというお酒を造っていました。日本では、見たことのないラオスのお酒ですが、作り方は焼酎を造るのに似ています。しかし、原料がお米や麦ではなく、モチ米を使っているのがこのお酒の特徴です。ドラム缶で造られるので、日本の工場と比べればたいしたことはないだろうと思い試飲させていただくと、アルコール 50 度以上のラオラーオが口の中に広がり、体が熱く、いや痛くなってしまいました。中には、60~70 度になるものもある恐ろしいラオラーオ。二日酔いを避けるには、「脂肪分の多い魚か鳥を先に食べておき、一気に飲んだ後でミネラルウォーターをこっそり飲むに限る」と現地のガイドさんが教えてくれました。

地酒造りの村には、家族で織物をしているお店も多く、織った製品をその場で販売する人がたくさんいました。村では、多くの子どもたちが店に立ち、親の手伝いをしている姿を見かけました。大人が作り、子どもたちが売ることによって、その村の大切な伝統が守られていることが分かりました。(杉村定則)

#### ⑮ サンコン村（紙漉き、織物の村）

紙漉のサンコン村では、大人から子どもまで一家総出で紙漉をし、彩色をしていた。中学生くらいの少女が紙を漉いた後、それを干す年配の女性、漉いた紙で作った袋に絵を描く中年の男性、紙漉で作った葉

書に僧侶の絵を描く小学生、村全体が美術作品の生産基地となっていた。商品の種類もとても多く斬新なデザインで素晴らしい作品が多かった。

織物の村サンハイ村では、蚕を飼い、絹糸を結っていた。絹糸は草木染めで染色し、ラオスシルクを織っていた。絹糸だけでなく、麻や綿で織る商品もあり子どもたちも販売を手伝っていた。小さいときから家の手伝いを自然と行い、商売を経験しているこの国の子どもたちは生きる力が育っていると感じた。大人の前を通るときには頭を下げ、家族に感謝して生きる姿は日本人が忘れかけた家族の絆を思い出させてくれた。(櫻井利幸)

紙漉き村で一番印象に残っているのは、紙漉きで作ったポストカードに、少年が絵の具を使って絵を描きそれを商品として売っていたことだ。絵には共通する描き方があるようで、ラオスのマーケットでよく見かける絵だった。一生懸命に描いている少年の姿を見て、思わずその作品を買ってしまった。これが彼の仕事だそう。織物の村で最初に目に入ったのは、織物をする女性の姿だった。手と足を使い、とても上手に機織りをしていた。糸をつむぐ女性のそばでは、子どもが手伝いをしていた。商品は、ラオシルク100%のものから、綿や麻を取り入れたお値打ちのものまであった。働く女性の美しさと強さを感じた。(浜島直美)

## ⑩ ビエンチャン市内市場

ビエンチャン最大規模の生鮮食料品の市場には、狭い路地に肉、野菜、果物、魚を売る店がぎっしり詰まっていました。魚は特に豊富で、メコン川で捕れたコイやナマズ系の魚が売られ、一匹で売っている店、切って売っている店、生きたまま売っている店など、店によって形態が違っていました。小型の扇風機や棒にビニール袋をつけてハエを追い払っていましたが、それでは追いつけないほどの状態でした。現地に住む日本人は市場が開店する時間に新鮮な品物を購入するそうです。食べるものに困ることのないラオスですが、日本人は工夫しながらも現地に溶け込んで生活していました。

タラート・サオはラオス最大のマーケットで、生活家電のほか、貴金属や装飾品が売られていました。また、観光客はTシャツや工芸品、アニメのCDを買ってラオスのお土産を選んでいました。その中でもひととき目立ったのが「シン」というラオス伝統のスカート売り場で、多くの布地を売っている店がありました。男性客は少なく、男性用の服もほとんど売られていませんでした。ラオスでは伝統的な男性用の衣装はないというのは驚きでした。(杉村定則)

もう日本に帰るといふ日、ビエンチャン市内でスーパーに行ったとき、「レジがある！」と日本では当たり前前の光景に新鮮な驚きを感じました。同時に、お店の人と会話をせず会計を済ませることに寂しさを感じてしまいました。そのくらい、マーケットなどでお店の人と1対1で「これいくら?」「もう少し安くならない?」と、言葉が通じないながらもジェスチャーを交えて電卓片手に買い物をするのがすっかり当たり前になって、その触れ合いが心地よくなっていたのだということに気付かされました。そんな触れ合いは、ナイトマーケットで味わうことができます。ナイトマーケットにはTシャツや小物、アクセサリなどがたくさん並び、その中から自分のお気に入りを探して値段交渉をするのは、とても楽しいひとときでした。

スーパーは、さすがに品揃えも多く、お土産を大量に買いそろえるのには最適です。現地の調味料だけでなく輸入の物も多く、近隣諸国とのつながりも感じられました。スーパーはまだラオスではまだ珍しいということで、さすが首都だなという貫禄さえも感じました。(山田浩子)

## ⑰ ビエンチャン市内歴史施設

高さ45mの黄金の等。中には仏陀の骨(仏舍利)が納められているタートルアンはビエンチャンのシンボルであるだけでなく、ラオス内外からの信仰も厚い。16世紀半ば、ルアンパバーンからビエンチャンに遷都したセーターティラート王の命により建設が始まり、その後で破壊や修復を経て、1930年代から本格的な修復で現在の姿になった。外壁の一边は約85mの正方形で、その中の庭に、さらに一辺約60mの正方形の土台をもつ塔が建っている。

ワット・シーサケットは、1551年にセーターティラート王が建立を指示したと伝えられている寺院。19世紀には、シャム(タイ)からの独立運動を起こしたアヌ王がこの寺院に地方長官を集め、国家建設について意見を交換したという。本堂には、2052体の仏像が並び、回廊に彫られた3420の小さな穴には2体ずつ仏像が安置されている。ワット・ホーパケオは、ビエンチャンに遷都が行われたとき、エメラルド仏を安置する目的で1563年に建立された。1730年、1828年のシャム(タイ)の侵入により破壊され、エメラルド仏も持ち去られた。

これらの歴史施設は、美しい信仰の国ラオスが見られると共に、度々隣国の侵入に遭ってきたラオスの過去が感じられる場所だった。(櫻井利幸)

ワットはお寺という意味がある。ビエンチャンではたくさんのお寺を拝見することができた。そのどれもがとても美しかったが、日本のお寺とは全く異なる美しさをもっていた。同じ仏教のお寺でも日本のお寺とラオスのお寺で異なった雰囲気があるので、国による仏教の文化の違いに興味深いものがあった。

「ビエンチャンの仏像の頭の上は壊されている。」良く見ると本当に頭の上の部分だけきれいに破壊されていた。当時の仏像の頭の中には金が入られていた。その金を戦争で取られてしまったらしい。他にもビエンチャンのシンボルにもなっているタートルアンには45mもの高さの金の塔があるが、それも当時のものは戦争で破壊され、新しく建てられたものだという。歴史施設をたくさん見させていただいたが、多くの歴史施設が戦争の影響を負っていた。戦争によって、とても重要な歴史施設が失われてしまうのは本当に残念なことだと感じた。(早川修平)

## ⑱ 青年海外協力隊(小学校教諭及び理数科教師)活動 [バンクン]

ラオスの小中高等学校に「掃除の時間」があるのには驚いた。とても親密感が持てた。そんな掃除の時間に関わっての青年海外協力隊の荻野さんのエピソードで考えさせられることがあった。ある日、荻野さんが掃除を生徒と一緒にやろうとしたところ、校長先生に「掃除をしないでほしい」と言われたという話だ。ラオスの子どもたちにサヤブリーで実際に接し、青年海外協力隊の荻野さん・西川さんの話を聞いて感じたことは、生徒にとって「先生」は威厳ある絶対的存在であり、また先生もそうあらねばならないということだ。そんな思いが象徴される行事がラオスにはある。それが「先生の日」だ。生徒たちはこぞって先

生にプレゼントを渡し感謝を表すのだそうだ。かつての日本もそうだったかもしれない。時代の流れで今は様変わりし、日本の「先生」の立場や業務は多様化している。ラオスの教育の中に、いま私たち「先生」も考えるべきことがあると感じた。(和田さとみ)

ビエンチャンから車で1時間半。そこで待っていたのが青年海外協力隊の西川さんと荻野さん。残念ながら高橋さんは体調不良のためお会いできなかったが、お二人の先生から貴重なお話を伺えた。最初に食事をしながら自己紹介と会話を楽しんだ後、お二人から勤めている学校やそこでの活動内容について説明を受けた。西川さんからは計算ドリルを作成して実際に使ってもらっていることを聞いた。ラオスのために一工夫しているところは黒板に先生が書いて子どもたちが答えるという形式にしたこと。生徒分のプリントを十分に用意できないラオスならではの工夫だった。

もう一つ印象的だったのは、教育局からの通達で、掃除をすることになった。毎朝と木曜日の午後に行っているが、最初子どもたちは何を拾っていいかわからず、落ち葉をたくさん拾ってくる割にはビニール袋を拾ってこないという状況だったそうだ。これを聞いて、ラオスの子どもたちは知らないのだ！とショックを受けた。掃除をする、ゴミを拾うといった些細なことにも教育は必要で、改めて教育の力を認識すると同時に、自分が教育に関わる責任を感じた。

その後、お二人が務める学校を見学させてもらった。小学校には鉄棒とブランコが置いてあり、日本の小学校と同様、休み時間になると子どもたちが遊ぶのだろうと想像させられる。廊下から教室を覗き込むと、机・イス・掲示物がある。窓にはガラスが入っておらず、屋根はトタン。日本と比べると簡素だが、子どもたちがいるときは明るく元気な声が響くのだろう。子どもたちは学校が楽しいという。学ぶ・知ることへの喜び、みんなと一緒に学習できる楽しさ、嬉しさをいっぱい感じているのだろう。翻って、日本では学ぶ喜びや学校に行く楽しさを味わっている子が少ないのではないかとされている。でも、本当にそうなのか。我々教師は日本人の子どもたちを満足させるだけの授業を行い、子どもたちが楽しい・嬉しいと思えるような学校をつくっているのかなと考えさせられた。(加藤 篤)

#### ⑱ JICA ラオス事務所員との懇談会

武井所長を含め、4名のJICAラオス事務所の職員さんとクア・ラオにて上品なラオス料理の会食をした。武井所長と席が隣りだったこともあり、所長さんと楽しく会話をしながら食事ができた。カオ・ニャオが出てきたときに、自然と手で取って食べていたところを所長さんが見つけ、「もうすっかりラオスに馴染んできましたね。」と言われたとき、何だか嬉しかった。たった10日間だが、それなりにラオスの人々と積極的にふれ合って、少しでもラオスのことを分かろうとしてきたことが現れたのかなと思った。それを、所長さんに伝えると、笑いながら、「いい研修をされましたね。」と言われて、またもや嬉しくなった。所長さんや所員の方から普段の食事を伺うと、「マーケットでご飯や食材を買って、家でつくって食べる。」との事だった。所長さんは日本から偉い方が来ると接待のため外で食事をする機会が多いということだったが、所員の方々の普段の生活を知ることができて楽しかった。特に何かなければビエンチャンの事務所にいることの多い所員さんや所長さんにとっては、自分たちの体験してきた話が面白いようで、研修の様子を熱心に聞いて下さった。(加藤 篤)

クア・ラオという名前の素敵なレストラン。ラオス舞踊を見ながらの懇談会だった。一週間以上ラオス料理を食べてきたが、素敵なレストランで、おしゃれな器に盛られていると、今までとは違った味に感じた。ラオスの民族衣装を着た美しい女性の踊りは、料理の味をいっそう引き立てた。JICA ラオス事務所の方の苦労話や笑顔になれた時の話を聞いていると、目標を持つ大切さと、頑張る努力する素晴らしさを感じた。私の研修テーマである「わかり合い、助け合い、学び合う大切さを実感する」を、JICA ラオス事務所の方に改めて教えていただいたような気がした。(浜島直美)

## ⑩ JICA ラオス事務所報告会

ラオスでの 10 日間で改めて振り返りました。そして思うこと。それは本当にラオスに来られてよかったということです。人の温かさ、緩やかな時間の流れ、きらきらと輝く日本人の活躍、どれもこれも実際に来なければ感じるこのできなかったことばかりでした。また、仲間の存在の大きさも改めて感じました。一人では感じられなかったことも、多くの仲間の存在によって深く考えることができたと思います。報告会ではそんな一人一人の思いがあふれていました。多くの学びあるこの研修を支えてくださった方々へ、改めて感謝したいと思いました。

そして最後に JICA の方から伺ったラオスの課題。今後、どのようにラオスは発展していくのか、自分たちはどうそのことを引き付けて考えていけるか、日本に帰ってからも考え続けていきたいと思っています。(籠谷美紀)

「人と学び合うことは面白い。」そう感じた報告会でした。それぞれが違った思いをもち、旅をしていたことを聴き、新たな視点ができました。同じ場所を訪問しても見ている視点が全く違う人もいれば同じ人もいる。でも抱く感想は少し違う。同じ志をもち、同じ悩みをもち、同じように学びたいという意欲をもった仲間と共に旅ができたことへの感謝や幸せを感じた報告会でした。

また、ラオスでは今現在も、JICA スタッフだけではなく非常に多くの日本人が活動をしています。色々な立場の人間が、それぞれにできることを悩みながらがんばっています。みんなラオスが好きで、目の前にあるラオスのために何かしたいという思いをもっています。それらの思いを持ち帰り、より多くの人に広めることが今回研修に参加した私たちの使命だと感じました。(服部 咲)